

## 01.『目覚めた森で、エルフさんにおならで介抱される』

【とある深い森の中で...】

【鳥のさえずりと、小川のせせらぎが聞こえている】

お目覚めに、なりましたか...？  
ここは森のはずれの、泉のほとり。  
わたくししか知らない、秘密の場所。  
あなたがここで眠っていたのは、森が運んでくれたから。  
あなたがこうして目を覚ましたのは、こもれびがまぶたをなでたから...。  
...ああ、無理をなさらないで。  
旅人様の体はいま、ひどく傷つき、疲れ果てています。  
村を襲った魔のものは、おかげで無事、退けることができました。  
いまは何も案ずることなく、ただゆっくりと、お休みください...。  
申し遅れました...わたくしはメナリ。  
この森に暮らす、森人の末裔。  
人間の呼び名を借りるのならば...エルフと言え、おわかりでしょうか。  
わたくしが参りましたのは、他でもない、あなた様のため。  
これより『姫隠れの儀』をとりおこない...  
わたくしメナリの身をもって、その傷と痛みを癒やしましょう...。  
緊張なさる必要はございません。  
どうかわたくしに、お任せください...。  
さあ、まずはお体の力を抜いて...それから、目を閉じて。  
ゆっくりと、深呼吸しましょう。  
鼻から大きく息を吸って...口から、吐いて...。  
すう...はあ...。  
わかりますか？森の匂いが。  
木々と、土と、こもれびの香り。  
澄みきった森の、朝の空気。  
すう...はあ...。  
そうです、そのまま...。  
んっ...。

【空気の抜けるような、かすかな音が聞こえる】（04分19秒～）

ふう...。  
さあ、ゆっくりと、息を吸って...吐いて...。  
いかがですか？  
雨後に香る、朽ち木のような...。  
茹でたタマゴを、割ったような...。  
わたくしの匂いが、わかりますか？  
どうぞ目を、お開けください。  
苦しくはありませんか？  
めまいなど、ございませんか？  
よかった...。  
それではそのまま呼吸を乱さず...  
わたくしが三つ数えたら、ゆっくりとお体を起こしてみてください。  
よろしいですか？いきますよ...？  
いち、にの、さん...。  
いかがですか？  
先程よりもいくばくか、お体に力が戻られましたか？  
ふふっ...いきなりのことで、驚かせてしまったかもしれませんね。  
ごめんなさい。  
けれどこれが、わたくしの一族に伝わる、癒やしの儀式...  
『姫隠れの儀』なのでございます。  
われわれエルフのおとめは元来、その身にマナを宿すもの。  
それはほんらい不浄とともに、体の外へと放たれて、土や木々を育ててゆく...。  
この儀式では、健康な娘が巫女となり、  
床に伏したものと向けて、腹にたたえたマナをかぐわす...。

そうやって、心や体に傷を負ったものに、森の命を分け与える。  
今となっては忘れ去られた、いにしえよりの癒やし魔法…。  
旅人様。森の恩人たるあなた様には、もはや感謝をしてもし尽くせません。  
同胞たちを代表し、この身を尽くし奉仕させていただきたく存じます。  
しかしながら、もし…  
もし、わたくしのかぐわすマナの香りが、お体に合わないようでしたら…  
お気に召さないようでしたら…  
そのときは遠慮などなせずに、すぐにおっしゃってくださいね？  
…ふふっ。お心遣い、感謝いたします…。  
それではゆっくりと、呼吸を続けて…そう、そのまま…。  
いきますよ…よろしいですか？  
…ん。

〔控えめな音とともに、エルフの腹のなかの香りが放たれる〕（07 分 51 秒～）

はあ…。  
吸って…吐いて…。  
最初は無理をなさらずに、ゆっくりと呼吸を繰り返して…。  
わかりますか？  
森にただよう、マナの香りが。  
…ふふ。わたくしの匂い、お嫌いではありませんか？  
よかった…。  
それでは、わたくしが三つ数えましたら、今度はゆっくりと立ち上がってみてください。  
…ご安心ください、わたくしもお体を支えます。  
よろしいですか？いきますよ…？  
いち、にの、さん…よい、しょ。  
すん、すん…。  
はあ…旅人様の首元、不思議な匂いがいたします。  
鉄と煙と…それから汗。  
この森のものではない匂い。  
けれどなぜだか、落ち着く匂い…。  
どうぞ、わたくしの手をお取りになって？  
そのままこちらへ、お手を伸ばして…  
わたくしの体に、触れなさってください。  
ふふ、ためらわれることなどありません。  
わたくしがお手を、導いてさしあげます…。  
頬。首筋。鎖骨。  
ひとつひとつ、確かめるように…。  
乳房。腹。太もも。  
そうです。どうぞ両腕を体に回して…。  
お尻。腰。背中。  
このままわたくしと、お体を合わせて。  
真正面からぴたりと…。  
胸と胸が、触れあうくらいに。  
お腹とお腹が、接するくらいに…。  
…ふふ、旅人様。  
そのように腰を引かずとも、構いませんよ…？  
遠慮なさる必要はございません。  
熱く、硬く…屹立されていらっしゃるのですね？  
承知しております。  
それは、あなた様のせいではない…わたくしが、そうさせたまでのこと。  
わたくしの放った香りには、森の命がしみこんでいる…。  
そこが熱く脈打っているのは、力が戻りつつある証拠…。  
旅人様。  
どうか今だけはしがらみを忘れ…このわたくしを、お使いください…。  
ふふっ、そう…ぴたりとお体を合わせて。  
わたくしの腰に、腕を回して。  
まずは呼吸を、整えましょうか。  
大きく息を吸って…吐いて…。

わたくしの体温を、感じますか...？  
わたくしも、旅人様の熱くて硬いもの...腹のところに、感じます。  
へそのちょうど、下のところ...。  
どんどん硬さを増してゆく、あなた様の先っぽが、  
わたくしの腹をやわらかく押して...。

っ...。

〔ごぼぼ、と下腹部の震える感触が、へそに押し付けられたペニスを伝う〕

くすくす...。

やだ...♡

そこに直接、伝わってしまいましたか？

わたくしの腹が、動く音...。

はい。また、出そうです...。

よろしいですか？それでは、このまま...。

んっ...。

〔静かな音とともに、エルフのおならが森に放たれる〕（13分41秒～）

んふ...。

ふふっ...お分かりに、なりましたか？

腹がわずかに、へこんだのが。

わたくしの体の内から外へ...マナが放たれていったのが。

さあ、お鼻からゆっくりと息を吸って...お口から、吐いて...。

すうー...はあー...。

...んっ。

〔熱くて長いすかし屁が、森の空気のなかに攪拌されていく〕（14分23秒～）

ふー...。

熱い釜で煮た、ダイコンの香り。

やわらかく積もった、土の香り。

そう。これが...。

わたくしの香り...。